

あすは冬至、寒さはこれからが本番とのことです。みなさま健やかに新年をお迎えください。

現在会員登録数 3,647 人さま。次号は 1 月 20 日発行の予定です／

☆. . . : * . . . ★. . . : * . . . ☆. . . : 目次 * . . . ☆. . . : * . . . ★. . . : * . . .

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

☆. . . : * . . . ★. . . : * . . . ☆. . . : * . . . ★. . . : * . . . ☆. . . : * . . . ★. . .

■ ----- ■
【1】お知らせ

● IICLO オンライン講座 I 「授業に役立つ！子どもの文学5つのレッスン」の配信を開始しました

小学校の国語教科書には、教材として多くの児童文学作品が掲載されています。本オンライン講座では、よく知られた児童文学教材を読み直し、そこから発展した読書案内を行います。〈全5回〉

第1回「宮沢賢治を読み直す①「注文の多い料理店」 ※申し込み受付中！

講師：宮川健郎（当財団理事長）

発展読書案内：土居安子（当財団理事・総括専門員）

視聴料：1300円 対象：子どもの本に関心のある方ならどなたでも

◇第2回以降は随時配信。全5回の内容、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#iicloonline1

◇お申し込みは「Peatix」から ↓↓

<https://iicloonline1-1.peatix.com>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

*年間1万円以上ご寄付いただいた方には、イイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【 2 】 コ ラ ム
■ ----- ■

《 1 》 この本読んだ？ Yasuko's & Yoko's Talk

『博物館の少女 怪異研究事始め』富安陽子/著 借成社 2021年12月 対象年齢：小学校高学年から

あらすじ：明治16年、13歳のイカルは、大阪の古道具屋の娘だったが、両親が亡くなり、遠縁である東京の大澤家に住み込む。大澤家の老夫婦の娘は、画家の河鍋暁斎に嫁いでおり、その娘で15歳のトヨが博物館に連れていってくれる。イカルは博物館で目利きの腕を見込まれ、怪異を研究しており、トノサマと呼ばれる織田賢司様の元で古蔵の整理を手伝うことになる。古蔵に泥棒が入ったため、イカルがトノサマに仕える少年アキラとともに所蔵品をチェックすると、黒手匣（くろてばこ）が盗まれていることがわかった。トノサマ、イカル、アキラは誰がどんな目的で盗まれたのかを調べる。

D Y：この本を出された動機を教えてください。

T Y：私は定期的に今までに書いたことのない話を書きたくになります。今回は、明治時代から大正時代ぐらいの「現在に近い昔」の話を書いてみたいなと思ったことがきっかけです。そこで、何の計画もなく、まずは、その頃のことについての資料を何百冊も読み漁りました。すると、いろいろなことがつながってきて、明治16（1883）年という年が浮かび上がりました。

D Y：では、最初から博物館を舞台にした作品を書く決めていらしたわけではないんですね。

T Y：東京国立博物館を舞台にしようと思ったのは、編集者の広松健児さんといっしょに、どこかの博物館の刀剣の特別展に隕鉄（鉄・ニッケル合金から成る隕石）で作られた刀が出品されると聞いて観に行ったら時、突然、「博物館」を舞台にしようといひらめきました。そして、今度は博物館を中心に資料を集めて読みました。すると、東京国立博物館にとっても明治16年はオープン1年目であることなど、明治時代のさまざまな歴史とつながっていることがわかりました。

D Y：書き始められるまでに長い時間がかかったのですね。そして、書き始められてから本が出版されるまでにもたいへんなご苦労をされたとうかがいました。

T Y：足掛け6年、おそらく6～7000枚は書いたと思います。

D Y：わーそんなに。富安さんは手書きで原稿用紙に書かれるので、原稿用紙の山ができましたね。それだけ書き直されたからか、本当におもしろくて、最初の10ページぐらいまで読んで、「続きを早く読みたいけれど、あー、終わってほしくない。」と思った久々の作品でした。苦労された点はどんな点ですか。

T Y：時代ものの難しさは、時代が遠ざかることで、子どもにとってお話が遠ざかるように感じてしまいがちになるところを、いかに身近なこととして

イメージできるように描くかということだと思います。説明をしないで、明治時代を感じられるように描くことが本当に難しかったです。また、登場人物たちのことばづかいにも苦労しました。作品世界が自分のものになるまでに時間がかかりました。

D Y：読者である私は、好奇心旺盛な主人公、イカルといっしょに明治時代を生きているような感覚を覚えながら読みました。そして、この作品は何といても怪異＋謎解きがおもしろい作品です。最後まで読んで、もう一度読みなおすと、謎のヒントがあちこちにあることがわかります。また、「怪異」に富安さんらしさを感じながら読みました。加えて、富安さんの現在の児童文学のありように対する、作品を通しての「児童文学はおもしろくなくては」というメッセージを感じました。作品で提示された謎はまだまだ残っています。続刊を楽しみにしております。ありがとうございました。

* 今回のゲストは『博物館の少女』の著者の富安陽子（TY）さんです。富安さんは当財団の評議員でもあります。

* この本についてもっとお知りになりたい方は『博物館の少女 怪異研究事始め』刊行記念 富安陽子さんオンライントークイベント（丸善ジュンク堂書店主催 開催日時：2022年1月22日（土）15:00～16:30）があります。
<https://online.maruzenjunkudo.co.jp/collections/j70065-220122>

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第76回「植物医師」

反転する自画像、変転の劇

前回（当メルマガ NO.135）の「馬の頭巾」の甲一はデクノボー的な主人公でしたが、劇「植物医師」の爾薩待（にさつたい）は、なかなかの山師です。上司をぶんなぐって県庁をやめた爾薩待は、にわかに植物医師を名のって開業します。彼は、「百姓のことなんざ何とでもごまかせるもんだよ」といって、おとずれる農民たちに陸稲が育たないのは針金虫の害だから亜硫酸をかければよいと繰り返して、診察料をせしめます。ところが、稲は枯れてしまって、農民たちは抗議してきます。

これは、1923年5月、花巻農学校の創立記念日に生徒たちが演じた劇の台本で、時は1920年代、ところは盛岡市郊外となっています。農学校教諭としての宮沢賢治は、化学、数学（代数）、英語のほか、土壌、肥料、農業実習（主に水田耕作）といった科目を受け持っていましたから、舞台の上の植物医師は、賢治の戯画化され、反転した自画像かもしれません。植物医師役の生徒の衣装は、賢治自身の白衣だったともいうのです（富田博之編『宮沢賢治童話劇集』1、1981年に収録された教え子の回顧談による）。

「私は植物一切の医者ですから。」と共通語で見栄を張る爾薩待は、「じゃ、この野郎山師たがりだじゃい。まるきり稲枯れでしまたな。」「ひでやづだじゃ。春がら汗水たらすてようやぐ物にすたの二百刈づもの、まるっきり枯らしてしまたな。」と口々に方言で攻め立てられて、しおれ、うなだれ、しょげることになります。いよいよしおれる爾薩待が気の毒になった農民たちは、「人の

医者だて治るごともあれば療治後れば死ぬごともあるだ、あんまそう云うなじゃ。」と矛をおさめます。「さあ、行くべ。どうもおありがどごあんすた。」とあいさつして退場する農民たちを医師が見送って、あっけない幕切れです。

賢治の戯曲は「植物医師」をふくむ全部で4編ですが、「宮沢賢治戯曲の主人公は、帝国主義・資本主義に寄生するれっきとした悪党であるのと同時に、究極的には許され愛されるべき道化でもある」としたのは高橋康也です(高橋「不条理な祝祭劇」1977年)。「植物医師」もまた、「悪党」が同時に「道化」となる変転の劇なのです。(馬車別当)

(本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション』2によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 30

本物の探検旅行なんだと思うと、わくわくした。いたるところ道路標識だらけではあったけれど、気分はすっかり前人未踏の砂漠やジャングルの探検隊だった。

(「ぼくらの冒険旅行」『遠い町から来た話』 ショーン・タン/著 岸本佐知子/訳 河出書房新社 2011年10月 p.89)

12月16日(木)にアメリカ合衆国の絵本作家、デイヴィッド・ウィーズナーさんと、オーストラリアの絵本作家、ショーン・タンさんに対談をしていただき、録画しました(字幕を付けて2月ごろ公開予定です)。その中で、お互いの好きな作品について語っていただいたとき、ウィーズナーさんは、『アライバル』(ショーン・タン/著 河出書房新社 2011年4月)にしようかと思ったけれど、と言いつつ、『遠い町から来た話』を挙げられました。それは、絵と言葉の組み合わせによるおもしろさや全体の装幀のユニークさは言うまでもなく、身の回りにある「不思議さ」が巧みに描かれているからだとおっしゃいました。そして、その中で一番好きな話は「ぼくらの冒険旅行」だとおっしゃいました。

「ぼくらの冒険旅行」は兄弟の物語です。兄さんとぼくが、父さんの車に積んであるストリートマップを見ながら最後のページが「268番」で終わっていることに対して、その続きの地面があるか、「そこから先がぷつんと切れてなにもない」かについて言い争います。そして、決着をつけるために、「正式な調査旅行」に出かけます。引用にあるように、最初は意気揚々と出かけますが、夕方になり二人とも疲れきります。そして、268番の地図の終わりの場所に到着します。

絵は4枚あり、兄弟が土手を駆け下りている場面、下向き加減で道を歩き続けている場面、広い道を横切っている場面が描かれ、最後は結末と呼応しています。すべてのページに黒い鳥がいて、イメージは『夏のルール』(ショーン・タン/著 岸本佐知子/訳 河出書房新社 2014年7月)とも重なります。

ウィーズナーさんは、近所を歩くだけなのに、子どもにとっては特別なわく

わくする冒険として感じられる様子が伝わると言われていました。4人の姉がいる末っ子として感じるころがあったのでしょうか。タンさんは二人兄弟の弟。読み直して、子ども時代の一コマがユーモラスかつ想像豊かに描かれた作品だと改めて思いました。(Y)

《4》 行って来ました！

宝塚市立手塚治虫記念館で来年2月23日まで開催されている「中原淳一展～現代にも響く“美”のメッセージ～」に行ってきました。「ZONE1：中原淳一とは」「ZONE2：中原が伝えた様々な“美”」「ZONE3：現代にも響くメッセージ」に分けられ、原画や雑誌など約100点が展示されています。

最初のゾーンには、『それいゆ』『ひまわり』『ジュニアそれいゆ』『女の部屋』などの雑誌の表紙や原画が展示されています。戦前の『少女の友』の付録として、啄木かるたやファッションブックなどが紹介されており、当時の少女たちはこれらの付録に心をときめかせていただろうなと思いました。

ふたつめのゾーンは、テーマに分けて解説がつけられています。「ファッションスタイル」という展示では、いろいろな色の服を来た女性の絵に、中原による色のコーディネートが解説が付されています（「配色の研究」）。渡仏していた昭和25年頃の「パリからの寄稿」というテーマの展示には、「屋根裏部屋の少女」という絵があり、チェックのテーブルクロスや水差しのある部屋が描かれていました。また、花屋、本屋、果物屋、お菓子屋などにいる少女の絵もあり、今見てもとてもおしゃれに感じられます。

「シルエット（影絵）」というテーマの展示では、海外の名作物語「シンデレラ」や「湖の娘」などのシルエットの絵が、コマ割りで描かれていて、可憐な少女たちのイメージが伝わります。多くの少女マンガ家が中原の描き方に影響を受けたと解説されていました。「ライフスタイル」というテーマの展示では、女の子の部屋のレイアウトの工夫や、押し入れを本棚やクローゼットに改造したりする提案、空き箱をリメイクした人形の作り方などの雑誌の記事の原画やパネルがあり、私も試したり、人形を作ったりしてみたくまりました。

中原淳一の絵からは少女が工夫をして、美しさを楽しむ提案が数多くあり、少女たちが豊かに生きたいという思いとうまく合致していたんだと感じました。そして、そこが手塚治虫の少女マンガともつながる点なのかなと思いました。(K)

宝塚市立手塚治虫記念館

<https://www.city.takarazuka.hyogo.jp/tezuka/>

■ ----- ■

【3】全国イベント紹介

■ ----- ■

● J B B Y 子どもの本の翻訳フォーラム「子どもの本・日本と世界 視野の違いを探る」

日時：2022年1月22日（土）15：00～17：30

場所：オンライン（Zoom）

パネリスト：宇野和美（スペイン語翻訳家）、こだまともこ（英語翻訳家）、佐藤まどか（児童文学作家）、那須田淳（児童文学作家）

コーディネーター：さくまゆみこ（英語翻訳家）

定員：120人 参加費：有料

主催：（一社）日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■

【4】プレゼント ☆

■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『博物館の少女 怪異研究事始め』をプレゼントします。富安陽子さんのサイン入り。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.135 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。締切は1月10日（月）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — |

年の瀬を迎え、この一年を振り返れば、リモート会議が行われたり、多くのイベントが中止を余儀なくされたりしました。新しい年は多くの出会いが可能な年になりますように。本年もご愛読いただきありがとうございました。多くのあたたかいご支援に深く感謝申し上げます。来年もどうぞよろしくお願い致します。（T A）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願い致します。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
